

リレー連載

# 農薬を変えた農薬～開発ものがたり・日本の創薬力～ (6)

## 殺菌剤チオファネートメチル

日本曹達株式会社 研究開発本部小田原研究所 佐野 慎亮 (さの しんすけ)

### はじめに

殺菌剤チオファネートメチルが昭和46年(1971年)に販売されてから、今年で44年目を迎えるが、本剤の開発コードがNF-44であることに何かの因縁を感じる。さらに研究初期の化合物が合成され、スクリーニングによる評価研究が始まってから50年が過ぎた現在、当時の研究や開発事情をよく知っている方々の多くは鬼籍に入られた。本稿は当時の社内報告書や生物評価を牽引されていた安田康博士へのインタビューなどを参考に、あまり知られていない開発までのエピソードを中心に、本剤の特長や農業現場における国内外の普及状況や今後の役割等についても簡単にふれ、これからの農薬開発についても言及したい。

### I 大磯の研究施設

神奈川県大磯町に生物研究所が設立されたのは昭和34年であり、その10年後に本剤の前身にあたるチオファネート、さらに2年後に本剤が開発された。本研究所には5億円が投じられ、当時としては最先端の生物評価

研究施設であり、昭和37年に皇室の義宮殿下がご視察された(図-1～3)。

ところで、研究所の立地場所として、なぜ大磯が選ばれたかについては、「今後の農薬は国内の水稲だけでなく世界的な視野に立つべきであり、ブドウやカンキツの病害虫が重要である」という東大の服部静夫教授の意見に従い、カンキツの北限を調査した結果、交通の便がよく人材交流が容易な大磯が選ばれたという。その後、研究所は増設を重ね、昭和42年には日本で初めて「薬剤の安全性についても、人畜をはじめ自然環境に対し、将

# 植物防疫



図-2 義宮殿下のご視察風景

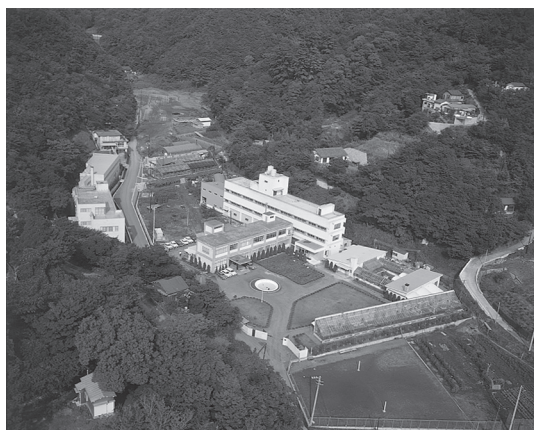


図-1 生物科学研究所



図-3 研究室のご視察